

(7) 帯広川

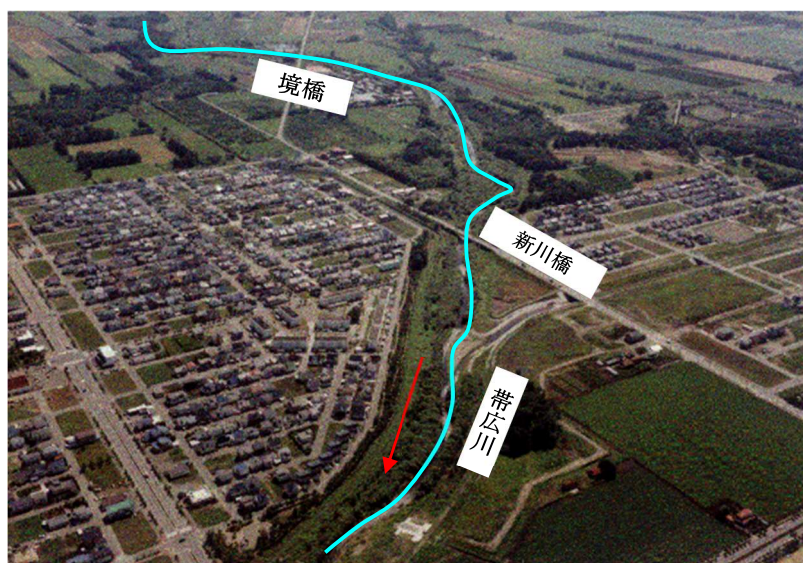
帯広川は、その源を日高山系に連なる帯広岳（標高 1,088.8m）に発し、途中イマナイ川などの支川を合わせ、帯広市と芽室町の市町界を流下し、帯広市街地を貫流して札内川に注ぐ、流域面積 185.6 km²、流路延長 46.0km の一級河川である。

帯広川の河川名は、帯広の地名の源であり、アイヌ語のオペリペリケブ（川口が幾筋にも裂けている川の意）に由来するとの説がある（「北海道の川の名」^{※1}より）。

帯広川の流域の地形・地質は、源流部は先第三系～古第三系中の川層群の砂岩泥岩およびそれらに侵入する深成岩体、ホルンフェルスから、中～下流域は膨大な砂礫とそれを覆うローム・粘土からなる河岸段丘からなる。中下流域では段丘面上に小規模ながら氾濫原が形成されている。

流域は、帯広市と芽室町との境に位置し、上中流域は農地が広がり、下流域は帯広市街地が広がる。

帯広川の治水は、昭和 3 年から昭和 7 年に帯広市街地区間の一部が改修されたが、その後も度々浸水被害を受けたため地域住民より河川改修を要望され、昭和 28 年に抜本的な改修に着手した。改修着手後も、昭和 37 年 8 月の台風 9 号及び 10 号では浸水面積 642.0ha、浸水家屋 1,376 戸などの数々の浸水被害に見舞われた。これを契機に、洪水時には帯広市街地上流で新水路により十勝川へ放流させ、帯広市街地への洪水流量を減少させる治水計画を立案することになり、昭和 45 年に帯広川の中・上流部も含めた改修計画を策定し、工事に着手した。整備中の昭和 50 年 8 月の豪雨では浸水家屋 160 戸、昭和 56 年 8 月の豪雨及び台風では浸水面積 40.6ha と大きな被害を受けたが、平成 6 年に新水路の分流堰が完成し、洪水時は帯広市街地上流からの流水を新水路に流下させている。これまで、大臣管理区間上流端の鎮橋しずめばしから帯広川分流点までの延長 5.7km 区間は昭和 40 年までに整備が完了しており、分流堰から雄馬別川合流点おまべつがわまでの延長 24.6km 区間については、平成 27 年までに整備が完了している。また、帯広川分流堰から境橋までの帯広川周辺には、帯広市街地が広がっており、市街地を流れる河川としては治水安全度が低く、近年の集中豪雨などによる都市型水害事例から周辺住民や帯広市から強く改修を要望されていることから、支川つつじ川合流点付近から境橋までの 1.7km 区間において、河川改修を実施し、治水安全度を確保する必要がある。



▲帯広川周辺の市街地

表 1-8 帯広川における主な災害

| 年次 | 浸水面積 (ha) | | | 浸水家屋 (棟) | | | 被害原因 |
|--------------|-----------|-------|-------|----------|-----|------|-----------|
| | 農地 | 宅地 | 計 | 床下 | 床上 | 計 | |
| S37.8.3 | 391.0 | 251.0 | 642.0 | 640 | 736 | 1376 | 台風9号・10号 |
| S47.9.6-9.19 | 25.0 | 62.5 | 87.5 | 3 | 0 | 3 | 豪雨及び台風20号 |
| S50.8.5-8.25 | 0.0 | 1.7 | 1.7 | 137 | 23 | 160 | 豪雨及び暴風雨 |
| S56.8.3-8.6 | 40.6 | 0.0 | 40.6 | 0 | 0 | 0 | 豪雨及び台風12号 |



▲西13条付近<昭和50年8月>
出典：水害(北海道開発局・北海道)



▲西15条付近<昭和56年8月>

(8) ウツベツ川

ウツベツ川は、その源を十勝平野中央部の丘陵地に発し、流路を北東にとり、畑作地帯、帯広市街地を貫流した後、帯広川に注ぐ流域面積16.5km²、流路延長14.2kmの一級河川である。

ウツベツ川の河川名は、一説によるとアイヌ語のウツ・ペツ（大きな川や沼に肋骨のような形に
 ついている川の意）に由来する（「北海道の川の名」
 ※1より）。

ウツベツ川の流域の地形・地質は、砂礫およびそれを覆うロームからなる河岸段丘面で構成される。帯広川への合流部では砂礫の上位に薄い腐植土や粘土が堆積し、局所的に氾濫原が形成されている。

流域の大部分は帯広市街地であり、上流域には農地がみられる。



▲ウツベツ川周辺の市街地

ウツベツ川は、昭和28年から平成5年にかけて、帯広川との合流点から市道南15線までの9.4km区間において改修が行われた。ウツベツ川的主要な被害は昭和56年洪水で、浸水面積54haに及ぶ被害が発生しているが、近年においては、集中豪雨などによる水位の上昇が頻繁に見られ周辺の市街化が進んでおり、市街地を流れる河川としては未だ治水安全度が低く、近年の集中豪雨などによる都市型水害事例から周辺住民や帯広市から強く改修要望があがっているため、流下断面が不足する中駒橋上流から大空2号橋までの5.9km区間において、河川改修を実施し、治水安全度を確保する必要がある。

表 1-9 ウツベツ川における主な災害

| 年次 | 浸水面積 (ha) | | | 浸水家屋 (棟) | | | 被害原因 |
|--------------|--------------|-----|------|----------|----|---|---------|
| | 農地 | 宅地 | 計 | 床下 | 床上 | 計 | |
| S56. 8. 3-6 | 54.0 | 0.0 | 54.0 | 0 | 0 | 0 | 停滞前線、台風 |
| H15. 8. 6-10 | 公共土木施設被害(河川) | | | | | | 台風10号 |

出典：水害(北海道開発局・北海道)



▲ウツベツ川の洪水氾濫状況（大空地区）＜昭和56年8月＞

出典：水害(北海道開発局・北海道)

(9) 柏林台川・第二柏林台川

柏林台川は、その源を西22条南4丁目付近に発し、帯広川に注ぐ流域面積10.6km²、流路延長4.0kmの一級河川である。第二柏林台川は、その源を帯広・広尾自動車道南側の北伏古東付近に発し、柏林台川に注ぐ流域面積6.7km²、流路延長6.2kmの一級河川である。

柏林台川および第二柏林台川の流域の地形・地質は、十勝川南岸の氾濫原を構成する砂礫とそれを覆う薄い砂～シルト層からなる。

流域の大部分は帯広市街の住宅地であり、上流域は農地となっている。

柏林台川・第二柏林台川は、帯広川との合流点から市道西10号南線までの3.1km区間において、帯広川の改修工事に併せて昭和28年から暫定改修が行われた。近年においては、集中豪雨などによる水位の上昇が頻繁に見られる。周辺の市街化が進んでおり、市街地を流れる河川としては未だ治水安全度が低く、近年の集中豪雨などによる都市型水害事例から周辺住民や帯広市から強く改修要望があがっているため、柏林台川の柏林台3号橋から第二柏林台川合流点までの1.0km区間および第二柏林台川の柏林台川合流点から栄森橋までの1.0km区間において、河川改修を実施し、治水安全度を確保する必要がある。



▲ 柏林台川・第二柏林台川周辺の市街地



▲ 光西橋上流の河川水位上昇
<平成23年9月>



▲ 広陽橋上流の河川水位上昇
<平成23年9月>

(10) 伏古別川

伏古別川は、十勝川に注ぐ流域面積5.1km²、流路延長3.5kmの一級河川である。

伏古別川の河川名は、伏古別村の地名由来である、アイヌ語のフシコヘツ（古川の意）に由来するとの説がある（「角川日本地名大辞典」*2より）。

伏古別川流域の地形・地質は、十勝川南岸の氾濫原を構成する砂礫とそれを覆う薄い砂～シルト層からなる。

伏古別川流域の大部分は帯広市街の住宅地であり、昭和48年から昭和61年にかけて、十勝川との合流点から報和橋上流までの2.8km区間において、下流約0.5km区間の河川改修が完成させ、それより上流では暫定改修が行われた。近年においては、集中豪雨などによる水位の上昇が頻繁に見られ、特に、平成22年8月の豪雨では、計画高水位を超過する水位上昇が発生した。また、平成23年9月の豪雨では、床下浸水1戸の内水被害が発生している。平成28年8月の台風10号では0.4haと床上浸水1戸の内水被害が発生し、市街地を流れる河川としては未だ治水安全度が低く、近年の集中豪雨などによる都市型水害事例から周辺住民や帯広市から強く改修要望があがっているため、流下断面が不足する十勝川合流点より上流0.6kmから報和橋上流までの2.2km区間において、内水対策を含めた河川改修を実施し、治水安全度を確保する必要がある。



▲伏古別川周辺の市街地
出典：帯広市資料

表 1-10 伏古別川における主な災害

| 年次 | 浸水面積 (ha) | | | 浸水家屋 (棟) | | | 被害原因 |
|---------------|-----------|-----|-----|----------|----|---|-------|
| | 農地 | 宅地 | 計 | 床下 | 床上 | 計 | |
| H23. 9. 5-6 | 0.0 | 1.0 | 1.0 | 1 | 0 | 1 | 豪雨 |
| H28. 8. 30-31 | - | - | 0.4 | 0 | 1 | 1 | 台風10号 |



▲市街地の道路冠水（西地区）
<平成23年9月>



▲伏古別川内水氾濫状況（西地区）
<平成28年8月>



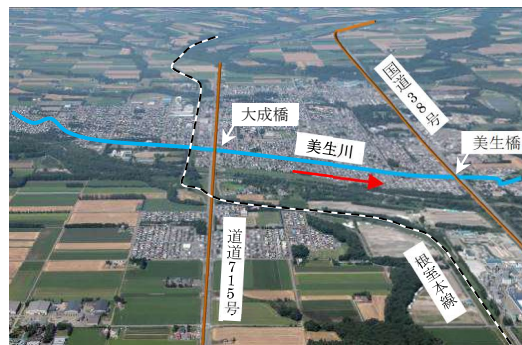
▲伏古別川内水氾濫状況（西地区）
<平成28年8月>

(11) 美生川

美生川は、その源を芽室岳(標高 1,753.5m)に発し、急峻な山地を流れ、北流しながらニタナイ川などの支川を合わせ、芽室町市街地の東側を流下し、十勝川に注ぐ流域面積 206.2 km²、流路延長 40.8km の一級河川である。

美生川の河川名は、アイヌ語のピパ・ウシ(沼貝・ある処)に由来するとの説がある(「北海道の川の名」^{*1}より)。

美生川流域の地形・地質は、川の源流域は片麻状花崗岩へんまじょうかこうがんが分布し、上中流域はこの地域の基盤岩である先白亜紀系の日高層群である。中流域から下流域にかけて洪積世の扇状地堆積物や段丘堆積物が見られ、川に沿って砂・礫などを主体とした沖積層が分布する



▲美生川周辺の市街地

出典:芽室町資料

美生川の上中流域は農地が広がり、下流域は芽室町市街地が広がる。

美生川は、昭和39年から54年にかけて、十勝川合流点から新嵐山橋下流までの12.0kmにおいて河川改修が行われた。しかし、それより上流区間においては、近年、平成28年8月の台風10号では、溢水による浸水が81.0ha、床上浸水1戸、床下浸水1戸の被害が発生し、翌平成29年9月の台風18号では、溢水により27.0haの浸水被害が発生している。さらに、近年の局地的な集中豪雨等による浸水被害の発生が懸念されることから、芽室町から強い改修要望が挙げられている。また、再度災害防止の観点からも、新嵐山橋下流から上美生橋上流までの8.0kmにおいて早急に治水安全度を確保する必要がある。

表1-11 美生川における主な災害

| 年次 | 浸水面積 (ha) | | | 浸水家屋 (棟) | | | 被害原因・被害状況 |
|-------------|-----------|------|-------|----------|----|---|-----------------------|
| | 農地 | 宅地 | 計 | 床下 | 床上 | 計 | |
| S37.8.3 | 139.0 | 0.0 | 174.0 | 0 | 1 | 1 | 台風9号 |
| S47.9.16-19 | 3.0 | 13.0 | 15.0 | 0 | 0 | 0 | 台風20号 |
| H28.8.30-31 | - | - | 81.0 | 1 | 1 | 2 | 台風10号 麦乾燥施設1棟：床下浸水 |
| H29.9.18 | - | - | 27.0 | 0 | 0 | 0 | 台風18号 |



▲新嵐山橋上流付近の被災状況

<平成 28 年 8 月>



▲上美生橋付近の被災状況

<平成 28 年 8 月>